

< 書評 > 張紫晨著『中国巫術』， 烏平安著『神秘的薩滿世界』

著者	色 音
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	3
ページ	243-245
発行年	1991-03-31
その他のタイトル	<Book Reviews> “ Chinese Shamanism ” “ Mysterious Shamanic Society ”
URL	http://hdl.handle.net/2241/14227

題)』1991刊行予定

(16) 新城定吉『成功と失敗への道—天体エネルギーへの接近—』私家版, 1985

新城定吉『宮古島の神秘的な石庭』月刊沖縄社, 1988

(17) 渡邊欣雄『沖縄の社会組織と世界観』283頁, 新泉社, 1985

(1990年8月, 凱風社刊)

張紫晨著

『中国巫術』

烏丙安著

『神秘的薩滿世界』

色 音[※]

上海三聯書店から中華本土文化叢書として張紫晨教授の『中国巫術』(1990年7月版)と烏丙安教授の『神秘的なシャーマニズムの世界』(1989年6月)が出版された。張教授と烏教授二人とも有名な民俗学家であるが、それぞれの立場から中国のシャーマニズムについて論じた。張教授の著作は中国漢民族の伝統的な巫術を中心に展開したが、烏教授の著作は中国少数民族のシャーマニズムを中心に展開したものである。両方ともシャーマニズムについて論じているがその重点点が違って、それぞれの特徴がある。シャーマニズムの定義について広義と狭義の二つの説があるが、張教授の立場は広義説に属するもので、烏教授の立場は狭義説に属するものである。

張紫晨教授の『中国巫術』は書名通り中国巫術を中心に論じ、中国巫術をシャーマニズムと関連しながら考察したものである。エリアード、張光直教授らを始め、数多くの学者達は中国の巫術を広い意味でのシャーマニズムとして把握してきたが、張紫晨教授も中国巫術をシャーマニズムと深く関係があると認め、その歴史的関連とそれぞれ

※筑波大学大学院地域研究科

の特徴を本書の第十二章では詳しく論述したのである。著者の学際的視点から中国巫術を切り込もうとした試みは本書の目次でははっきりしている。その目次は次の通りである：

一章、巫と巫術

- (一) 巫と巫術の関係
- (二) 中国の伝統的觀念から見る巫
- (三) 海外人類学界が見る巫
- (四) 巫と巫術に対する宗教学の觀念
- (五) 巫と巫術に対する民族学の觀念
- (六) 民族誌に見られる我が国の各民族の巫と巫術活動に関する記述

二章、巫術及びその原理

- (一) 巫術、巫法、巫技
- (二) 巫術の施行
- (三) 巫術の原理

三章、祭祀的巫術

四章、驅鬼的巫術

- (一) 祭鬼
- (二) 驅鬼

五章、招魂的巫術

六章、祈子的巫術

七章、医療的巫術

八章、生産に対する巫術

九章、建築に対する巫術

十章、敵に対する黒巫術

十一章、東巴教における巫術

十二章、シャーマン教における巫術

十三章、中国巫術と中国文化

- (一) 我が国の政治、歴史における巫術の役割
- (二) 中国巫術と道教
- (三) 中国巫術と文芸
- (四) 中国巫術と民俗
- (五) 中国巫術と中国文化心態

以上の十三章から成るこの本では、著者が多元的研究方法で中国巫術の多面(様)的性格を分析し、中国社会に果たした巫術の役割を豊富な文献資料によって指摘した。巫と巫術の関係について巫術は前に形成し、のちになって巫が現われてきた

と論じ、巫は中国の古代社会では政治活動にも活躍し、巫と吏官との結合は夏、商時代の普遍的な現象であり、巫は単なる巫術者ではなく、支配階層と官僚グループの一員として重要な地位を持っていたと論考した。巫は神々と人間との間に媒介としての役割を果たす点ではシャーマンの性格を持っており、現在まで生き残っている中国少数民族のシャーマン教をすでに衰退した中国古代巫術の活化石と見てよいというのは著者独特の見方であろう。中国文化の諸形態は巫術と切り離れない密接な関係があり、中国独特の宗教である道教は濃厚な巫術的背景のもとで形成し、漢の時代以後、巫術は中国道教に直接な影響を与えたので、実際、巫術と文学の関係もほとんど道教と文学の関係を通して表われていた。中国民俗の一つの事象としての巫術は信仰習俗だけでなく、その外の冠婚葬祭にも広く影響を与え、乃し中国人のすべての文化心態にまで深く影響したのである。

著者はマリノフスキーの『巫術・科学・宗教と神話』、フレイザーの『金枝篇』など巫術研究の理論的成果を参考しながら、方誌、民俗誌による自分なりの方法を開拓しようと試みた。

『神秘的なシャーマニズムの世界』の構成は、まず著者である烏丙安教授が序論としてシャーマニズムの歴史的あゆみをまとめ、そしてシャーマニズムの典型的な地域として北緯の40°以北の狭い地域に制限し、この地域のシャーマニズムだけが一番代表的であると主張したのである。本書の主な章、節は次の通りである：

一章、シャーマニズムにおける大自然界

- (一) 天と地
- (二) 日・月・星
- (三) 雷・風・火
- (四) 山・林・水

二章、シャーマニズムにおける動物の世界

- (一) 聖なる動物家族
- (二) 神獣
- (三) 霊禽
- (四) 動物神

三章、シャーマニズムにおける霊界

(一)、魂の霊

(二)、亡霊

(三)、神霊

四章、シャーマン

(一)、シャーマンたちとその分業

(二)、シャーマンの誕生とその継承

(三)、シャーマンの神性

(四)、シャーマンの装飾と祭具

(五)、シャーマンの聖なる機能

(六)、残留するシャーマン

結語

以上の構成をみると本書の内容は明らかであるが、本書で取り上げられた地域は主に北半球の地域であることを再び復述して置きたい。『神秘的なシャーマニズムの世界』ではウノ・ハルヴァ、ドルジ・バンザロフらの本から引用したところも少なくないが、主な資料来源としては民間文芸学者によって調査された神話、伝説の資料と地方文化室、郷土史料室などの地方研究機関から刊行した内部資料などをよく利用したのである。特に、内蒙古哲里木盟文化処より内部資料として刊行した『ホルチン・ボゲの芸術初探』（1986年4月）という本を利用し、まだ公開されていない内部資料を正式な刊行物に乗せ、それを全国、乃し国際シャーマニズム研究にまで知られるようにしたのは全くの著者の新しい創造と言えないが、ある程度の貢献であろう。本書のあとがきでは著者がこの本を書いた最初の動機と資料の来源について述べている。著者の説明によると、著者は1969年から1979年の間に遼北（遼寧北部）の農村で強制労働を受けたことがあり、その時シャーマニズムに関する原始的資料を集めたようで、なお1985年、1987年日本に来た際に櫻井徳太郎教授と田中克彦教授と知り合って世界シャーマニズム研究の新しい情報を知り始めたというのである。こうした実践的背景と理論的背景のもとでこの本が書かれたのである。

近年、中国大陸では“文化熱”が興起したことに伴って“シャーマニズム熱”も興起したと言えよう。1988年6月14日から17日にかけて、吉林省

の長春では“シャーマン文化討論会”が開かれ、同じく1988年の7月、内蒙古海拉尔市では“アルタイ語系諸民族の叙事文学とシャーマニズム”を中心テーマとした全国的学術会議が挙行された。シャーマニズムの実施調査も盛んに行われ、満族シャーマンだけでも老シャーマン50数人、新シャーマン50数人ぐらいがみつかった。シャーマンの神歌、神話、伝説などが山ほど収集されている。こうした豊富な資料によって書かれたシャーマニズムの本も次々に出版されている。その中、私の知っている限りでは『シャーマン教文化研究』（第1輯、吉林人民出版社、1988年）、『シャーマン教と東北民族』（吉林教育出版社、1990年3月、刻小萌、定宜庄著）、『叙事文学とシャーマン教』（内蒙古大学出版社、1990年、^{リンチンドルジ}仁欽道尔吉、郎櫻編）などの例をあげることができよう。張紫晨教授と烏丙安教授の本も中華本土における“文化熱”と“シャーマニズム熱”を背景に出版されたものである。

竹田旦著

『祖霊祭祀と死霊結婚』 一日韓比較民俗学の試みー

徳丸亞木[※]

本書は、『「家」をめぐる民俗研究』（1960年）を筆頭として、厚い研究実績を持つ著者が、本書の表題に冠したごとく、「比較民俗学」的視角で、新たに「家」をめぐる祖先祭祀の問題を論じた論文集である。

『序 祖先祭祀の民俗学』において、著者は、柳田民俗学における、「家」永続の原点、現実の「家族」と理念的な「家」とを結ぶ接点としての祖先祭祀の理解を評価する。しかし同時に、そこに見られる「家」制度の基礎を形成する長男子（嫡子）中心の観念による研究の呪縛を指摘し、この呪縛からの開放の糸口として、分牌祭祀（祖先祭祀権

の本・分家各々への複系的継承）、複檀家（家族成員の、異なる檀那寺への分属）、位牌分け（死者の複数の位牌の縁者への分散・多義的配布）の習俗を取り上げ、これらの習俗に非「男子中心」、非「長子中心」、本家・分家・婚家間の祭祀実修・継承権の対等性を指摘する。

こうした、従来の「家」通念から外れた習俗を研究の視野に納める姿勢を、著者は「複眼的」と表現する。そして、この「複眼的」研究の一例として、日本と類似した「家」通念（父系、長男子・一子残留直系家族、家永続願望、祖先祭祀の長子独占）を持つと理解されてきた、韓民族の類似習俗との対比、言わば「比較民俗学」的視角の必要性が主張される。

著者の韓民族の民俗文化の本格的研究は1973年の、和歌森太郎氏、任東権氏を中心とした、日韓共同民俗調査団の韓国調査に始まる。著者は、従来ややもすると日本固有のものとして、日本国内で自己完結的に祖型追求がなされてきた民俗事象が、韓国にも「より古風をおびて」存在していることを知り、「ともかくも比べてみず日本固有とか伝統的とか断定してはならないということ」で、海外を含めた比較の重要性を痛感した次第である」と、「比較民俗学」的発想の萌芽を語る。

しかし、著者の言う「比較民俗学」とは、海外との比較による日本本土の民俗文化の祖型追求に目的を置いたものではない。例えば3『位牌祭祀と祖霊観ー沖縄諸島』では、沖縄諸島の位牌祭祀と祖霊観の考察には、位牌や墓地をめぐる祭祀習俗、祭祀継承・相続をめぐる四つの禁忌を含む特有の祖先観の追求が重要であることを述べ、この何れもが日本本土には見出しにくい習俗と指摘する。つまり柳田、折口流の「日本古代の鏡」としての沖縄文化理解ではなく、むしろ日本本土との異質性に着目する必要をも認め、日本文化の外に立って日本を望む姿勢、言い換えるならば、日本の民俗文化の相対化の必要性を説く。

筆者の、この沖縄に対する姿勢は、韓民族の民俗文化に対しても共通するものである。長い間、別々の歴史を歩み、文化を異にしてきた、そして

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科